

アイヌ神話集序文  
コ タ ン 知里幸恵

其の昔此の廣い北海は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚兒の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活してゐた彼等は、眞に自然の寵兒、何と云ふ幸福な人だちであつたでせう。

冬の陸には林野をおほふ深雪を蹴つて、天地を凍らす寒氣をものともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟かな陽の光を浴びて、永久に囀る小鳥と共に歌ひ暮して、露と蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃ふすきをわけて、宵まで鮭とる鱒も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、圓かな月に夢を結ぶ。

嗚呼何といふ楽しい生活でせう。平和の境それも今は昔、夢は破れて幾十年、此の地は急速な變轉をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に拓けてゆく。

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野邊に嬉々として暮してゐた多くの民の行方も又何處？ 僅に残る私達同族は、進みゆくさまにたゞ驚きの眼をみはるばかり。而も其の眼からは一擧一動宗教的觀念に支配されて居た昔の人の美しい魂の輝きは失はれて、不安に充ち燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿！ おお亡びゆくもの……それは今の私たちの名、何といふ悲しい名前を私たちは持つてゐるのでせう。

其の昔、幸福な私たちの先祖は、自分の此の郷土が、末にかうした惨めなありさまに變らうなどとは露ほども想像し得なかつたであります。

時は絶えず流れる。世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗殘の醜をさらしてゐる今の私たちの中からも、いつかは二人三人でも強いものが出て來たら、進みゆく世と歩をならべる日も、やがては來ませう。それはほんたうに私たちの切なる望み、明暮祈つてゐること御座います。

けれど……愛する私たちの先祖が、起伏日頃互に意を通ずる爲めに用ひた多くの言語、言ひ古し、殘し傳へた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく亡びゆく弱きものと共に消え失せてしまふのでせうか。おゝそれは餘りにいたましい名殘惜しい事で御座います。

アイヌに生れアイヌ語の中に生ひたつた私は、雨の宵雪の夜、暇ある毎に打集うて私たちの先祖が語り興じた、いろ／＼な物語の中極小さな話の一つ二つを描いて書連ねました。私たちを知つて下さる多くの方に讀んでいただく事が出來ますならば、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。（了）（大正十一年三月一日）

亡くなられた幸恵女さん

幸恵さんは登別村知里高吉さんの御息女でございます。大正十一年九月行年二十歳を一期として逝かれました。アイヌの信仰より生れた幽雅なる學問と、深い神秘とが、一冊に書きをさめられた「アイヌ神話集」の序文がこの本文です。情操の豊かな清い涙ぐましい同女の性格に敬意を表します。（東京小石川若荷谷五二 郷土研究社發行）

序

その昔この廣い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚兒の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、眞に自然の寵兒、なんという幸福な人だちであつたでせう。

冬の陸には林野をおほふ深雪を蹴つて、天地を凍らす寒氣を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟かな陽の光を浴びて、永久に囀る小鳥と共に歌ひ暮して露とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃ふすきをわけて、宵まで鮭とる鱒も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、圓かな月に夢を結ぶ。嗚呼なんという楽しい生活でせう。平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急速な變轉をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に拓けてゆく。

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野邊に山辺に嬉々として暮してゐた多くの民の行方も亦いずこ。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまにたゞ驚きの眼をみはるばかり。しかもその眼からは一擧一動

宗教的感念に支配されていた昔の人の美しい魂の輝きは失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おお亡びゆくもの……それは今の私たちの名、なんという悲しい名前を私たちは持っているのでしょうか。

その昔、幸福な私たちの先祖は、自分のこの郷土が末にかうした惨めなありさまに變らうなどとは、露ほども想像し得なかつたのでありましよう。

時は絶えず流れる。世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗殘の醜をさらしている今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出て來たら、進みゆく世と歩をならべる日も、やがては來ましよう。それはほんとうに私たちの切なる望み、明暮祈つてゐる事で御座います。

けれど……愛する私たちの先祖が起伏日頃互に意を通ずる爲めに用いた多くの言語、言ひ古し、殘し伝えた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失してしまうのでしょうか。おゝそれはあまりにいたましい名殘惜しい事で御座います。

アイヌに生れアイヌ語の中に生いたつた私は、雨の宵、雪の夜、暇ある毎に打集うて私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中極く小さな話の一つ二つを描かない筆

に書連ねました。

私たちを知つて下さる多くの方に讀んでいただく事が出來ますならば、私は、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。

大正十一年三月一日

知里幸恵